

渦巻く大陰謀

サウジとイラクは八一四キロメートルに及ぶ長い国境線を持っている。

そのほとんどが沙漠だ。

もっとも、アラビア・フェリックス(幸せなアラビア)に属するアシル、アルバハ地方を除いてサウジ全体が沙漠と考えて良いからそれは自然なことだ。

この沙漠はイラク、ヨルダン国境に広がる広さ五万七〇〇平方キロメートルに及ぶサウジ第二の沙漠・ネフドの一部で太陽光線によりその色を赤と白に美しく変化させる。

サウジとイラクとの国境には、以前、中立地帯が設けられていた。

設けられていた大きな理由はサウジとイラク、それぞれの時の政権、列強の思惑などがあつたためだが、それだけではなかつた。

砂漠には駱駝、山羊、羊を放牧する遊牧の民・ベドウィン

がいて彼等は国境線に関係なく一〇〇〇キロメートル以上に亘り自由に移動した。国境を画定する場合にサウジ、イラク双方の遊牧民が放牧権を持つ場所を設ける必要があったのだ。

その後、イラク側の政権交代を経てこの中立地帯は解消され国境が画定されたが、双方の行き来は相変わらず頻繁だった。そんなことだから過激派、テロリストなどが国境を歩き来するのを完全に阻止するのはもともと困難なことだった。

サウジからは沙漠のサソリや血気盛んな若者達がイラクに入りスンニ派のシーア派に対するテロを支援した。

サウジでは内務省が公表した新重要指名手配者リスト中のテロリストで海外に逃亡したものの多くがその中に含まれているものと見ていた。それは、二〇〇五年六月にイラクでその内の一人が米軍の空爆により死亡したと報じられたことから明らかだった。

イラク政府は時には国境でテロリストを逮捕することに成功した。

サウジ政府もイラクから沙漠のサソリがサウジに戻りテロを行うのを恐れ嚴重な警備を敷いていた。二〇〇五年六月にはサウジ政府がイラク国境に塀を作るとのニュースが流れたほどだ。このニュースについては直ぐにサウジ政府高官から塀では無く赤外線センサー付きの鉄条網を設置する計画であるとの発言があった。

この計画のその後の進展は定かではない。

新聞ではここ半年間で六〇〇人以上のイラク人がサウジアラビアに潜入しようとして逮捕されたことも伝えている。

慎太郎は、その中にテロリストが含まれているものと見ていた。また、現在も相変わらずテロリストが日常的に国境を行き来しているのではないかと考えていた。

さらに、シリア、ヨルダン経由でイラクに潜入するサウジ人テロリストがいることも伝えられていた。

慎太郎は、スルタンが電話で最後に言っていた通り本当にイラクに行ったのかどうか、行ったとすればどのようにしてイラクに入ったのだろうかなどと考え気が気ではなかった。

イラクではもともと自爆テロなどで毎日のように大勢の人々が死んでいた。ここのところスンニ派とシーア派の対立の激化などにより、より一層混迷が深まっている。スルタンがイラクに入ったとすればその身には常に危険が付きまわっていることになる。

いわば、毎日死と隣り合わせの生活を送っているようなものだ。しかもスンニ派を支援することがスルタンの使命だから尚更のことだ。

二月下旬に、無事、日本に戻った慎太郎は東京本店でサウジとの調整を進めていた。

プロジェクトKの規模は当初に比べれば縮小されたが、重要プロジェクトであることには変わりがなかった。アルコバ

ールの南も連携して良く動いてくれた。リヤドの林公使もプロジェクトを側面から支えてくれていた。

そして、慎太郎が帰国してから瞬く間に二カ月以上が過ぎた。スルタンからは相変わらず何の連絡もなかった。

慎太郎は、スルタンの心配をしながら、プロジェクトKの最終調整を進めていた。

そこに植木から突然電話が入った。

「池波さん。お久し振りです。お元気ですか。植木です。この度サウジから戻りました」

植木はめでたく任期を満了して無事帰国したとのことだった。

「植木さん、お懐かしいですね。お電話有り難うございました。私はなんとかやっています。植木さんはお元気ですか」「元気です。有り難うございます」

慎太郎は、植木が忘れずに電話をしてくれたのが嬉しかった。その声を聞いてレジデンスの光景が目の前に懐かしく蘇（よみがえ）ってきた。

「この度は無事のご帰国おめでとうございます。是非一度お会いしたいですね。お忙しいでしょうけど、宜しければ、早速、歓迎夕食会でもいかがですか。私は明後日なら空いています。それで宜しければ、私はどこでも結構ですからお店を決めて頂けますか」

帰国早々に声をかけては失礼かとも思ったが、時間が過ぎると却って忙しくなることも海外赴任経験の多い慎太郎にはわかっていた。

それに何よりも植木とは一刻も早く会いたかったのだ。
植木もそうだった。

「有難うございます。明後日は私もOKです。それでは、お言葉に甘えて遠慮なくお店を選ばせてもらいましょう。日本は久し振りなので美味しい日本蕎麦を食べたいですね。浅草の奥、象潟通りに面したところに大黒屋というところがありますがそこではいかがでしょうか」

相当なグルメと聞いていた植木らしく即座にそう応えた。
「勿論、結構です。浅草の大黒屋さんと言えば雷門の側にある大きな海老天で有名な天麩羅屋さんしか知りませんでし

た。それは楽しみです」

慎太郎は植木に任せて正解だったと思った。関西育ちの慎太郎には浅草は馴染(なじ)みの無いところだった。

植木は東京生まれの東京育ちで浅草には子供の頃から馴染んでいた。

その昔、浅草寺近くの寺に灸(きゅう)を据えに行く祖母に頻繁に連れられて行って灸が終わるまで松屋の屋上で遊んでいたが、その頃は屋上から隅田川が良く見えた。

植木は久々にその浅草に行けるのが楽しみだった。

慎太郎は植木からその後のサウジの話を聞くのも楽しみだったが、何よりもまるで戦友のように無事帰れた喜びを分かち合うのが楽しみだった。

二人は雷門で落ち合って仲見世通りを抜け浅草寺の境内に入った。観音堂は既に閉まっていたが観音堂の前にでんと置かれた巨大な銅製の常香炉からは未だに線香の香りと微かな煙が漂っていた。植木は、その前に立つと、その煙を頭に掛け始めた。

「池波さん、ご存知かもしれませんがこうすると頭が良くなると言われましてね。いや、懐かしいものです。しかし、後で良く聞いてみると、本来は観音堂にお参りする前に煙を掛けて体を清めるためのものらしいんですね。また、一般には体の悪いところを治してくれる厄除けの煙とも言われているんですよ。そうであれば私は悪い頭を治すためにやって来たということになるんでしょうか。まあ、何が本当かわかりませんがとにかくいつもこうしているんですよ」

植木は何回かこれを繰り返していた。慎太郎も真似てやってみたが、既に観音堂が閉じられていてはあまり意味がないもののようにも思えた。

その後、お堂の脇を抜け言問い通りに出た。そして言問い通りを横切り向かいの柳通りへと入って行った。大黒屋のある象潟通りまでは少し距離があったが、植木と慎太郎の二人は下町の風情を楽しみながら歩いた。

鰻(うなぎ)の寝床のように縦長の大黒屋の店内は片側が座敷、片側が椅子席になっていた。二人はお上さんに従い中に入ると座敷に座った。

店はお上さん一人で切り盛りをされていて急がしそうだった。お上さんは注文を取ると、お酒は奥の冷蔵庫から好きなものを勝手にとって下さいと言って奥へと消えてしまった。勿論、飲んだ酒を紙に記しておくのだったが面白いシステムだった。

段々と人が混んで来るとお上さんは急がしそうに木製の下駄をカラカラと言わせながら客の間を飛び回って注文を取ったり料理を運んだりしていた。お上さんはそのように一生懸命なのだが、その割には料理の出も遅く決して快適なサービスとは言えなかった。

慎太郎はこれで料理が不味ければお膳を引っくり返してしまおうかなと思ったくらいだったが、板わさ、玉子焼きなど出てくる肴(さかな)は全て絶品だった。特にダツタン蕎麦がきなどは他に並ぶものはないだろうと思われた。それが評判でこの店はいつも予約で一杯とのことだった。

植木は、久し振りなのか、美味しそうに食べていた。
酒も銘酒揃いだった。

慎太郎は文句が言え無くなった。

「植木さんは良いところをご存知ですね。酒は美味しい、肴も絶品。大満足ですよ。植木さんの歓迎会のつもりが、自分で楽しんでしまいましたよ」

慎太郎は、ほろ酔い気分の良い気持ちになりながら正直にそう言った。

「やはり、日本は最高ですね。ファイサリアも結構でしたが、まあ、ここに比べれば駄目ですね。何しろこれがありませんね」

そう言って植木はぐい飲みを差し上げた。

「その通りですね。でも、一応改めてファイサリアに乾杯しましょうか」

慎太郎もファイサリア・レジデンスとニヤマトラを始めとするファアド、アブダラーその従業員達を想い出しながらい飲みを差し上げた。

「乾杯」

二人は一気にぐい飲みを飲み干した。

「池波さん、失意の胸にはこれが沁みますよ」

大分飲み進んだ頃、植木はくどくどと愚痴(ぐち)を並べ始めた。

「植木さん、一体どうしたんですか。無事第一〇回国際石油・ガスフォーラムを終えて凱旋帰国ではなかったのですか」

池波もぐい飲みを空けながら聞いた。

「カタールのドーハには世界中からエネルギー閣僚、代表的な国際石油会社、国営石油会社の最高経営責任者が集まってくれてその点では言うことはなかったのです。ただ、原油価格が会議開催の直前の四月二二日には七五・一七ドルへと急騰したのに、結局、高原油価格問題に取り組もうとの姿勢は最後まで見られませんでした。むしろ、会議後の議長・副議長声明には世界経済の成長は順調だとあたかも現状を肯定するような表現まで盛り込まれてしまいました。七〇ドルがどれほど異常な高値であるかとの認識は全く無かったので。困ったものです」

慎太郎は、終始一貫している植木の主張はもう憶えてしま

っているほどだった。

「そうでしたか。しかし植木さん、こう言うっては何ですが、カタールは産油国ですから原油価格が高い方が良いと思っ
ているんじゃないですか」

慎太郎がそう言うつと植木は堰を切ったように話し始めた。

「そうなんですよ。私も最近はそのように考え始めています。理事会メンバーには中国、インドも入っているんですが、所詮(しょせん)、主催国の意見には押し切られてしまうんですね。フォーラムは産油国と消費国の対話の場である筈なのに残念です。カタールは人口が少ないですから、それほど石油収入が必要とは思えないんですが、欲に目がくらんでしまっ
たんでしょう。基本的に人間は貪欲(どんよく)ですね。O P E Cの動きを見ているとまるで日なたぼっこをしている猫のようです。最初は恐る恐る陽射しの中に手を伸ばし足を伸ばししているのですが気がつくといつの間にか陽射しの中に全身を放り出してぬくぬくと無防備に良い気持ちで寝てしまっているんです。困ったものです」

慎太郎は植木の困ったものですの口癖を久し振りに二度も聞いて笑いそうになったがぐっと堪えていた。

「池波さん、私はこのような状況は、必ずしも、いや、むしろ産油国にとって良いことだとは思いません。このまま原油価格の高い状態が続き消費国が本気で石油代替を考えれば前にも言いましたがヤマニ元サウジ石油相の言うように地中に石油を残したまま石油時代が終わってしまうんじゃないでしょうか。消費国が石油供給の安全保障を求めたのに対し産油国が石油需要の安全保障を求めているのが嘘のようです。適正な価格にして石油がある限り環境には配慮しつつ末永く使ってもらおうように考えた方が良くはないでしょうか。開発途上国の石油需要増大、輸送用燃料における代替燃料開発の困難さを見て目が眩んでしまったのではないのでしょうか。勿論、世界経済にも丁度ボディブローのようにいずれ石油高価格が効いてくるのではないかと思えます」

石油に対する思い入れの強い植木の発言を慎太郎は静かに聞いていた。

「もっとも産油国を非難しても始まりません。今や世界が大陰謀の渦の中に取り込まれてしまっているんです。それに気付いていない人は勿論、気付いている人も結果的にそれに加担してしまっているんですから困ったものです。多くの誤解が存在しています。これはもう悲劇です」

植木の話は、ますます熱気を帯びて来た。

「大陰謀ですか。多くの誤解ですか、そして悲劇ですか……なかなか厳しいご指摘ですね」

慎太郎は蕎麦を注文するタイミングを捕まえることが出来なくなっていた。

「いやー、ちょっと言い過ぎましたかね。ただ、この際言わせてもらいますと石油市場は一見透明性が高く陰謀などに入る余地がないように見えます。また、単独で市場を操作することは困難であることも明白です。しかし、皆がある一つの方向でコンセンサスを得ると恐ろしいほどそれを制御で

きなくなります。一種の集団ヒステリーでしょうか。いやアパシー（政治的無関心）のような危険な状態と言った方が良いのかも知れません。いつも懸命かつ冷静に物事を分析する必要があるのではないでしょうか。今は先物市場が世界の原油価格をリードしていて、極端に言えば、ここでは投機家達はその膨大な資金力に物を言わせて彼らが思うように価格を決められると考えた方が良くないでしょうか。この二年間は実際の石油需給とは係わりなく価格が上昇してしまいました。主要な石油需給統計のどれを見ても二〇〇四年も二〇〇五年も石油供給量が石油需要量を日量一〇〇万バレル弱だけ上回っているのです。つまり、石油は余剰状態だったので。中東和平、イラク戦争などのジオポリティクス要因で価格にプレミアムが付いてしまっただけなんです。投機家達は、もっともらしい理論とムードの双方でこれを煽（あお）って価格引き上げに成功したんですね」

話の腰を折るようだったが、慎太郎は思い切って、そろそろ蕎麦を頼んだ方が良いのではないかと植木に聞いた。植木

は思い出したように美味しい蕎麦が無くならない内に頼まなければと言って慌ててカラカラと下駄の音をさせて走って来たお上さんに蕎麦を注文した。

「どこまでお話ししましたっけ。そうそう、もっともらしい理論とムードのことでしたね。もっともらしい理論については、リヤドで何度もお話させてもらいました。その中でも最もおかしいのが余剰能力不足問題です。特に製油所能力の不足問題ですね。世界中の石油会社は八〇年代から合理化、経営効率化のため製油所能力を大幅に削減して来て、現在ようやく理想に近い状態になって来たところなのです。余剰能力の不足は問題ではなく、むしろフル稼働を理想にしていますから余剰能力の解消は当然の帰結だと説明させてもらいました。私は、長年アジアの石油製品需給について調査を続けて来ましたのでこれが良く分かっています。この地域では石油製品需要は急増していましたが需給バランスが狂うほどの問題は無かった筈です。何度も言います。需給上の問題を抱えているのは強いて言えば米国だけです。米国の石油需要

量は日量約二二〇〇万バレルあるのですがその石油精製能力は日量約一七〇〇万バレルしかないのですから・・・。ただ、それも自国の製油所で必要な石油製品を供給しなければならぬという前提に立てばということなんです。私はその必要は無いと思っています。足りない石油製品を海外から輸入すれば良いのです。米国政府、石油会社などもそのように考えていることでしょう」

「経営効率化、合理化の事例を一つだけ言わせてもらえば、あの世界最大の国際石油会社であるエクソンモービルの場合、まだ合併前の一九七三年には両者併せて約日量九五〇万バレルの石油精製能力を抱えていたのですが、合併後の二〇〇一年には約六〇〇万バレルへと縮小しているんです。エクソンも、モービルもそれぞれが製油所を閉鎖したりしながら合理化に努めたんですが、結局、それも限界があることから一九九八年の年末には両者が合併することを発表したんです。これは衝撃的なニュースでしたね。スーパーメジャー誕生の瞬間でした。その後、BPも他の国際石油会社を合併し企業規模を拡大して続きました。シェブロンとテキサコも合

併しなければならなくなってしまいました」

「その後の合理化努力は、また、大変なものでした。当初の目標は三年後の二〇〇三年までに、合併前に両者併せて約一二十人居た従業員を九〇〇〇人ほど削減し一十万人強にするというものでした。結局、従業員数は二〇〇二年末で九万二五〇〇人、二〇〇三年末には八万八三〇〇人となりました。目標を達成するどころかそれを上回る削減数を達成しました。凄いもんです。その後も削減は続き二〇〇四年末では八万五九〇〇人となっています。さらに二〇〇五年末では八万三七〇〇人です。これは世界的なうねりとなって日本にも影響を与え三友石油は日本石油に合併されました。その前には大亜石油と協和石油が合併し宇宙石油となっていました。現在、日本の石油会社は四つのグループに集約されています。このように余剰能力、コストを最小限にするために世界的に血の滲むような努力が繰り広げられたわけです。これを忘れてはいけません」

慎太郎は、植木の熱気に圧倒されていたが、三友商事にも

関係ある石油会社の話まで出されると今更ながら身近なことのようには思えて来た。植木が必死で陰謀、誤解と主張する背景には合併などの合理化に伴う強い思いがあることがひしひしと感じられた。

「植木さん、良く分かりました。精製能力の不足問題を高原油価格の主因とする人たちの説明を聞く時には注意するようにしましょう。それから、前に将来の供給不安を煽っている人達がいることを非難されていましたが、先ほどのお話からすれば、この二年間、結局、供給不足は無かったと言うことですね。そうお聞きするとOPECの減産決議も納得がきますね。需給がタイトなら減産などする必要は無い筈ですからね。そうすると産油国が目標とする価格を見誤って減産などをするのは自分で自分の首を締めることになるんですね」

何度も聞いている内に、いつの間にか植木の主張が慎太郎の脳裏に明瞭に刻まれた。

「そうです。そうです。それから、大もとには前に言いました石油生産のピークが近いというピークオイル論があります。石油が枯渇する資源だからと言われると、それは厳然たる事実ですから、皆、納得してしまっただけですね。いずれそういう時期は来るでしょうがまだ早いと言えるのではないかと思います。ただ、そう考えて準備することは重要なことです。考え違いをしてはいけないということです。まして、ピークが明日にでも来るようなことを言って、一部の人が儲け、大多数の人がそれを負担するというのは、誠に不公正、不合理なことではないでしょうか。また、中東は不安定な地域でそこに石油供給の太宗を委ねているのは問題だから、それを回避するべきだと言うのは簡単なことですが、その対処方法は慎重に考える必要があると思いますよ」

植木は陰謀とか誤解とまでは書けないがエネルギー関係の専門誌などに石油価格高騰の背景などを客観的に分析して寄稿し続けているとのことだった。また、講演、講義の依頼もあるという。隠居生活をするつもりだが折角そのような機会を貰ったので寄稿などを続けたいと言っていた。

そこで、いよいよ美味しい蕎麦が出てきた。

「池波さん、済みませんでした。つい熱中してしまいました。これはいつまで話しても話は尽きません。ところで、この蕎麦は絶品ですよ」

そう言って植木は蕎麦を食べ始めた。慎太郎も食べてみたが、のど越しの良い大層美味しい蕎麦だった。

「一つ、お聞きして良いですか。植木さんは結局石油価格がどうなったら良いとお考えなのですか。そして、そのためにはどうしたら良いと思っておられるんですか」

植木は大分酔いが回ってきているようだったが、大分酒に強いのかしつかりとした口調で話し始めた。

「簡単に言わせて貰えば、最後まで皆から愛される石油であつて欲しいということです。そのためには適正な価格である必要があります。リスクヘッジとして先物市場が機能するのは自然ですが、一部の投機家、投資家が投機により膨大な利益を上げるのは頂けません。お蔭で先物市場は異常なほど

膨張しました。一九八四年平均では日量七四〇万バレル程度の出来高だったんですが二〇〇四年には二億バレルを超え、昨年は二億八〇〇〇万バレルを超えました。世界の石油需要量が日量八五〇〇万バレル程度ですからこれがいかに異常なものであるが知れるというものです。米国全体の石油需要量は世界需要の約四分の一程度にしか過ぎません。先物市場には利益を求めて続々と多額の資金が流入しているのです。資金を潤沢に持っているものが思う通りに市場を動かす暴利を貪(むさぼ)っているとすれば大問題です。経済の動脈とされている石油が単なる投機の対象となっては困ります、

「天然ガスの需要が増加したりして、石油は、前ほどは経済の動脈となっていないのではないかと言う人がいるかもしれませんが、しかし、石油価格が上がってそれに連れて天然ガス、そして石炭の価格まで上昇してしまったのです。結局、エネルギー価格全体が上昇してしまいました。そう言う人は経済の動脈であるエネルギー価格が投機対象になっても良いのですかと言い換えて問いたいですね、」

「それだけではなく、今や産油国の石油収入が急激に増加し

ましたし、スーパーメジャーの収益も増加しました。最大の国際石油会社エクソンモービルの収益は前に説明しました合理化努力も効いてはいますが、二〇〇二年の約一一五億ドルから二〇〇五年には約三六〇億ドルへと増加しました。キヤッシュフローは二〇〇二年の約二四〇億ドルから二〇〇五年には約五四〇億ドルとなっています。この急増振りは普通ではありません。誠に困ったものです、

「原油価格の適正水準については産油国と消費国でじっくりと話し合って欲しいと思っています。個人的にはバレル当たり三〇ドルから四〇ドルの間が良いのではないかと思っています。思い違いしてもらっては困るのですが、これは開発途上国も含めた世界経済にとってぎりぎりの線ということ です。原油価格が高くなれば、注意深く使うようになるし、省エネ、代エネに繋がって結果的に環境にも良いのではないかという人もいます。このような意見は一見正しいように思われますが、石油を高価格にして消費を抑制したいのであれば、より高い価格でも問題の無い消費国が国民のコンセンサスを得て税金をかければ良いことです。先進国では米国を除

き既に石油には相当の税金がかかっていることはご存知ですよね。石油代替エネルギー、省エネルギーの技術開発にその税金を投じれば、石油をより息長く使うことに繋がって将来的にも産油国に貢献するのではないかと思っています。」

「最後は、石油収入をどこに使うべきかの議論に行き着くのだと思います。悪く言えばお金の取り合いなのです。消費国が高い税金をかける場合には産油国の理解が必要でしょう。価格目標について合意が出来ればその実現は難しいことではありません。そして、価格を安定させるためには先ほど言いましたように今は石油需給がバランスして当然の時代であることを認識して焦らないように出来れば良いのだと思います。異常な投機も阻止しなければなりません。そうでなければまた石油価格の乱高下が続いてしまうことでしょう。」

リヤド以来、何回も聞いている内に植木の言いたいことが慎太郎にはだんだんと分かって来た。ただ、植木の説明を聞きながら植木が最初に言っていたジオポリティクス要因への対応を考えなければいけないのではないかと思っていた。その主因はイラクである。

そこで、慎太郎は、俄かにスルタンのこと、そしてサウジの治安情勢が気になってきた。

「ご説明有難うございました。植木さんのご説明を何回も聞いている内に仰っていることが良く分かりました。全くその通りだと思います。我々石油を扱っているものは、肝に銘じて長い目で見ながら商売を考えなければいけないと思いました。そのお話は大変興味がありますので、また、当社の幹部、関係者と一緒に詳しくお話を聞かせて下さい。ところで、植木さん。その後、サウジの治安情勢はいかがでしたか。リヤド支店、日本大使館からはそれなりに聞いてはいますが実感をお聞かせ願えますか」

植木は、出された茶を美味しそうに啜ると、

「幸い、池波さんが帰国された後、サウジ国内では大きなテロ事件はありませんでした。サウジ治安部隊の一斉捜査が続き、テロリストが五〇人弱逮捕されましたね。そんなことで、サウジ国内のテロ対策の進展によってサウジ国内のテロリ

ストがイラクに追いやられるというのがその後の特徴かも
しれません」

と慎太郎に語った。

「そうですね。後は、変な話ですがレジデンスの受付のファ
ハドが随分とシーア派嫌いであることが分かりました。彼は
基本的にシーア派の人間が不信心だと声を荒げていました。
お祈りの時間もいい加減だし弁解がましくお祈りは自分の
内面の問題などと言ってはいるが実際はきちんと実行して
いないなどと言って非難していました。それに、最近のシー
ア派によるスンニ派虐殺のニュースに憤っていましたね。シ
ーア派民兵による大量虐殺は政府や米軍の後押し少なくとも
も黙認が無ければ不可能だと断じていました」

あのファハドでさえそのようなことを言うのであれば、厳
格な規律を尊び、自分達をイスラムの本流と自覚しているス
ルタンはより先鋭的になるに違いないと思った。

慎太郎はますますスルタンのことが心配になった。

二〇〇六年五月三一日午前一〇時、 三友商事東京本社

突然、 慎太郎の私用携帯電話が鳴った。

「アツサラーム・アレイコム」

聞いたことのある懐かしい声が聞こえた。とても信じられなかったがそれは間違いなくスルタンのものだった。嬉しかった。

「スルタンだね。アレイコム・サラーム」

慎太郎は応えた。

「私は前に言った通りイラクにいる。現在はバグダッドだ」
スルタンの声はまるで隣で話しているように鮮明だった。

「そうか、あれからずっと心配していたんだ。とにかく出てくるニュースは悪いものばかりだからね。毎朝、駱駝のミルクと蜂蜜という分けにはいかないんじゃないかと思っ

て・・・」

スルタンの声は駱駝のミルクと蜂蜜と聞いて和らいだ。相
当の緊張下で過ごしているに違いないが懐かしい笑い声も
聞こえてきた。

「駱駝のミルクと蜂蜜か・・・、そうだね。」無沙汰だね、
「慎太郎、ところで、ようやくアブドルアジズから連絡があ
って来月末には米国に留学が出来ることになった。これで最
先端のバイオの研究が続けられる。聞くところによれば慎太
郎は日本に戻ったようだからいずれ日本でゆっくりと会い
たいね」

スルタンは嬉しそうにそう言った。

慎太郎は、スルタンが慎太郎の帰国を知っていたのには驚
いた。リヤドとの連絡はかなり良いようだった。

「それは良かった。おめでとう。僕も会いたいよ。一刻も早
く安全なところに行けることを祈っているよ」

慎太郎も日本でスルタンに会えば最高だと思っていた。
植木とつい最近行った浅草の大黒屋に連れて行ってダツタ

ン蕎麦がきななどを食べさせればどんな顔をするだろうかなどと想像していた。前にリヤドで日本料理店に連れて行った時のように笑いながら必死に箸(はし)を操って蕎麦を食べようとすることだろう。

「安全なところへ行けることを祈ると言ってくれたがここも随分と安全なんだよ。皆から大事にされている。信仰心の厚い人達でこんな時でもお祈りはきちっと励行している。スンニ派の人々はリヤドと全く異なることはない。皆、コーランを一生懸命学んでいる。私は彼等に比べれば裕福だから故郷から送金してもらって沢山のザカート(喜捨)をあげている。及ばずながら彼等の生活を守っているんだよ。またシーア派からの不当な攻撃を避ける方策も講じているんだ」

スルタンはさらりとそう言ったが、慎太郎にはスルタンがどのようなところにいるか想像も付かなかったしイラクのスンニ派がフセイン政権崩壊以来イラクの人口の六割を占めるシーア派から迫害を受けていることは知っていたので相変わらず心配だった。

「そうか、少し安心したよ。また、こちらから連絡させてもらおうよ」

と慎太郎が言うと、スルタンは現在使用している携帯はいつまでも使うわけではないしイラク内を移動していることが多いので繋がらないことが多いから、またスルタンの方から電話をすると応えた。

これがスルタンとの最後の会話となった。

スンニ派とシーア派の対立は激しさを増していた。慎太郎はその中でのスルタンの役割はとりわけ大きくて危険極まりないものと受け止めていたので心配だった。

シーア派の民兵は時にチェックポイントで通行人のIDを確認してスンニ派と分かると捕まえて拷問をしたり五〇人単位の虐殺をしたりしていた。黒い制服を着たシーア派民兵が黒覆面をしてスンニ派の家に押し入り家族全員を殺害したこともあった。このような半ば公の行為をシーア派主導のイラク政府も米軍も黙認しているというのがスンニ派の

見るところだった。シーア派にしてみれば長年フセイン政権下で苦しめられて来た歴史を忘れることは出来ないし、人によればその仕返しをしているつもりでいるに違いない。スンニ派の自爆テロにより大量の死者が出たりする度に両派間の対立がエスカレートしていった。

人口の約二割しかないスンニ派イラク人はフセイン政権下の優位が崩れ悲哀を味わっているものが多い。スンニ派イラク人の若者が身を挺してシーア派イラク人を助けたという美談も語りつがれてはいるがそれは例外だった。イラク政府のシーア派治安部隊がスンニ派の女性を強姦(ごうかん)したことからアルカイダがその報復として治安部隊の兵隊を大量に殺害するなどの事件まで発生していた。

もともと、イランのシーア派とサウジを中心とする湾岸のスンニ派は相互不信状態にあった。イランでホメイニ革命が起きた時、湾岸諸国はその革命の輸出を警戒した。香水師のハッサンは自宅の地下に本格的な核シェルターを作ったくらいだ。サウジでは東部油田地帯で、そして、バーレーンで

もシーア派は反政府運動を展開したことがあった。

最近、革命輸出、反政府運動ともに下火となったが火種が完全に消えたわけではない。

ワッハーブの伝統の濃いサウジとシーア派の本拠地イランとは、このように長い歴史的因縁、対立がある。アラブ諸国からすればアラビア湾、イランからすればペルシャ湾を挟んでのこのような対立・相互不信を解消することは困難で二〇〇三年のイラク戦争は結果的にこのような対立を激化させることになった。今では、この対立がイラク国内でサウジとイランの代理戦争的な様相を呈するようになっていいる。

イラクのアルカイダはイラク戦争直後にイラクに入ったヨルダン人・ザルカウイにより率いられていた。ザルカウイはイラク国内のスニ派過激武装勢力と連携して勢力を大きく拡大した。当初は、政府、米軍及び日本を含めたその同盟軍と対峙して反政府勢力の高い評価を得たが、その過度な宗教性などからスニ派内からも次第に批判、非難が高まっていた。ザルカウイの失態も続き他国のアルカイダ幹部が

らも訓戒が出たほどだったが、彼の最大の過ちは自分の出身地ヨルダンでの自爆テロだった。この自爆テロはヨルダンの首都アンマンにある三つの高級ホテルを狙った自爆テロで、内一つのホテルでは結婚式の最中に実行され、式に参加していた三〇〇人以上の民間人が被害を受けた。結局、この一連の自爆テロで六七人が死亡し一五〇人が負傷した。ザルカウイは後に自らの過ちを認めざるを得なかった。これによりザルカウイの求心力は極度に低下した。

慎太郎はスルタンがアルカイダに属しているとは思っていなかったが、その信条などにはかなりの共通性があると感じていた。ただ、それはサウジ人の若者全般にも共通するもので暴力性を伴うか伴わないかに大きな差があるだけだった。慎太郎はスルタンがその点でテロリストとは一線を画していると感じていた。